

(調査研究事業の場合)

**根拠に基づく介護実践を推進するための介護福祉士養成課程における  
介護過程教育のあり方に関する調査研究事業 報告書  
株式会社コモン計画研究所 (報告書A4版 134頁)**

**事業目的**

介護過程の展開（個別介護計画等を活用したPDCAサイクル）は、利用者の自立の維持・向上、利用者の望む生活の実現をするために必要な「根拠に基づく介護実践」である。介護過程は介護福祉士養成カリキュラムなどの介護人材の育成において重要な科目であり、介護福祉士の専門性の一つとして介護現場で実践することが期待されている。

一方で、令和3年度より始まった「科学的介護情報システム（LIFE）」（以下、「LIFE」という）は、アセスメント情報等のデータ登録及びフィードバックの活用を通じて、介護事業者におけるケアの質の向上を図る新たな取り組みである。LIFEの活用や推進において介護過程実践は重要であり、その担い手である介護福祉士及び介護職（以下、「介護福祉士等」という）の役割は大きい。

弊社では社会福祉推進事業において、令和2年度「介護現場における介護過程実践の実態調査及び効果検証に関する調査研究事業」を実施し、効果的な介護過程推進の要素及び介護福祉士等の役割を見出した。令和3年度「科学的介護情報システム（LIFE）を活用した介護過程実践に関する調査研究事業」では、LIFEを活用した介護過程実践の効果や影響及び令和2年度の残された課題について調査研究を実施した。また、令和4年度科学的介護情報システム（LIFE）を活用した介護過程実践に関する調査研究事業報告書」では、LIFEを活用した介護過程実践における介護福祉士等に必要能力や実践力に対応した介護過程教育の教育内容の整理・検討を行った（令和2年度以降の報告書の詳細は、<https://www.comon.jp/dl/project.html>を参照）。

本年度は、介護福祉士養成校において、「根拠に基づく介護実践」の教育・授業がどのように行われているのか、LIFEを活用した介護過程実践の視点を介護福祉士養成校の「根拠に基づく介護実践」の教育・授業にどのようにコミットさせられるかを明らかにする。その上で、教育や授業の事例を養成校において共有し、介護福祉士養成校における「根拠に基づく介護実践」の教育・授業の充実・深化を図ることを目的とする。

**事業概要**

### 1. アンケート調査（量的調査）

根拠に基づく介護実践を教育するための取り組みや工夫、ツールや指標の実態を学校種別（教育課程別）に把握・分析するとともに、LIFEの取り組みを介護過程教育に取り入れることについて、その可能性や具体的な教育・授業例、留意点、工夫点、課題などを把握するために、介護福祉士養成校を対象にアンケート調査を実施した。

本調査は、後述2. ヒアリング調査（質的調査）のスクリーニングを兼ねるとともに、具体的事例としてまとめる際のポイント（視点）の論拠として活用することも目的とした。

(1) 名 称

- ・根拠に基づく介護実践を推進する教育に関する調査

(2) 対 象

- ・介護福祉士養成校（全数調査）

(3) 配布方法

- ・郵送により送付

(4) 回収方法

- ・郵送、ウェブフォーム、エクセルダウンロードから回答者が選択

(5) 調査期間

- ・令和5年10月18日～11月15日
- ・締切後到着の調査票は対応が可能な範囲で集計の対象とした。
- ・礼状兼督促のはがきを2回送付（10月30日、11月7日）

(6) サンプルと回収

- ・対象数 409
- ・無効 3（調査の途中で募集停止や閉鎖等の連絡があった養成校）
- ・有効対象 406
- ・回答数 121
- ・回答率 29.8%

(7) 調査協力

- ・全国福祉高等学校長会様、日本介護福祉士養成施設協会様に、名簿提供についてご協力をいただいた。

(8) 調査における配慮・個人情報保護等の留意点

- ・LIFEについての説明書を作成して調査票に添付した。
- ・情報の扱いについて、回答者に以下を明示した。
  - ①調査で得られた内容は安全措置を講じてデータの漏洩がないように管理・保管し、施設や回答者が特定できないよう統計処理すること
  - ②調査への拒否があってもそのことで不利益が生じることはないこと
  - ③目的外に利用しないこと
  - ④回答にあたって合理的配慮が必要な場合は個別に対応する

(9) 調査項目

- ・養成校の基本属性
- ・根拠に基づく介護実践と介護過程を結びつける教育について
- ・LIFEという仕組みが介護過程教育に与える影響
- ・今後の調査事業へのご協力について（ヒアリング調査(質的調査)のスクリーニング)

(10) 主な調査結果

○教員のLIFEについての理解度（Q12）

説明できる程度	6.6%
だいたい理解していた	31.4%
あまり知らなかった	41.3%
知らなかった	17.4%

○教育において、LIFEを取りあげたこと (Q13)

介護過程の授業でとりあげた	14.0%
介護過程以外の授業でとりあげた	12.4%
とりあげたことはない	71.1%

○LIFEの理解は学生にとって必要だと思うか (Q18)

とてもそう思う	9.9%
そう思う	62.0%
そうは思わない	10.7%
全く思わない	1.7%

○LIFEを授業で取り入れる効果 (Q16)

「根拠ある介護過程実践に寄与する」といった回答が最も多く、次いで「養成校と現場のつながりが強くなる」という回答が多かった。学生が実際の現場実践をイメージできていないという課題は一定程度あるようで、養成校で習ったことと実習における実際とのギャップを埋めてくれる可能性がLIFEにはあると考える回答があった。また、実習指導巡回時に教員と学生、学校（教員と学生）と実習施設の間で共通言語ができることで、養成校と実習施設の指導に一貫性が生まれる可能性が感じられるという回答があげられた。さらに、養成校を卒業して現場で働くことになった時に役に立つこと、介護現場における介護の質が高まるなどの声が聞かれた。

## 2. ヒアリング調査（質的調査）

アンケート調査の内容をより具体かつ詳細に把握するために、ヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査の対象は、アンケート調査結果及び検討委員会での検討の結果をもとに有意に6つの養成校を抽出した。

なお、計画当初は4件程度のヒアリングを想定していたが、養成校において、介護過程等の授業におけるLIFEの活用が浸透していない状況が明らかになり、授業例等収集が困難であることが想定された。そこでLIFE活用の授業に関心を示していたり、探索的、試行的試みを行っている数少ない取組状況を把握するため、ヒアリング対象を2件増やす対応を行った。

また、当初はリモートによる調査実施を計画していたが、コロナ禍も収束し、介護過程授業の見学が可能になったことから、検討委員会等での委員意見等を背景に、養成校に赴いて対面で実施する方針に変更した。

### (1) 対象

- ・ 6か所の介護福祉士養成校（有意抽出）
- ・ 調査対象は、アンケート調査で協力可能と回答した養成校や、検討委員会委員からの推薦が得られる養成校とし、福祉系高等学校、専門学校、短期大学、大学の種別を考慮して有意に抽出した。

### (2) ヒアリング日時・対象校・対応者・実施者

- ・ 令和5年12月5日（火）14:00～ 対象校：日本福祉大学  
対応者：久世淳子先生、武田啓子先生、鈴木俊文先生  
実施者：鈴木真智子氏、藤野裕子氏、事務局2名（現地）
- ・ 令和6年1月12日（金）13:30～ 対象校：和歌山YMCA国際福祉専門学校  
対応者：嶋田直美先生  
実施者：品川智則先生、鈴木真智子氏、藤野裕子氏（リモート）  
事務局2名（現地）
- ・ 令和6年1月15日（月）13:00～ 対象校：淑徳大学短期大学部

- 対応者:木田茂樹先生  
 実施者:野田由佳里先生、金山峰之氏、事務局1名(現地)
- ・令和6年1月16日(火) 8:50~ 対象校:埼玉県立誠和福祉高等学校  
 対応者:中嶋芳乃先生、栗原真理江先生、大久保理沙先生  
 実施者:真田龍一先生、金山峰之氏(現地)  
 鈴木真智子氏(リモート)  
 事務局1名(現地)
  - ・令和6年1月17日(水) 14:45~ 対象校:大阪人間科学大学  
 対応者:時本ゆかり先生、水谷真弓先生、玉井美香先生  
 実施者:二瓶さやか先生、鈴木真智子氏、藤野裕子氏(リモート)  
 事務局2名(現地)
  - ・令和6年2月21日(水) 13:00~ 対象校:西九州大学  
 対応者:加藤稔子先生  
 実施者:井口健一郎先生、武田卓也先生、金山峰之氏(現地)  
 藤野裕子氏(リモート)  
 事務局2名(現地)

### (3) 実施方法

- ・現地に赴き、対面で実施した。
- ・埼玉県立誠和福祉高等学校、日本福祉大学、大阪人間科学大学については介護過程の授業についても見学を実施した。

### (4) 調査における配慮・個人情報保護等の留意点

- ・事前にヒアリングガイドを送付して、目的やヒアリング内容について情報の共有を図った。
- ・①ヒアリングは記録のため録画・録音をすること、②目的外では利用しないこと、③報告書の掲載にあたっては個人情報に配慮するとともに、事前に対象者に内容の確認をすることをヒアリングガイドに明記した。

### (5) 調査項目

- ・LIFEの要素を活用した介護過程教育の現状について
- ・LIFEの要素を活用した介護過程教育の今後の可能性や期待について

### (6) 主な調査結果

#### ○LIFEに関する教育の現状

LIFEに関する教育の現状については、授業の中で制度の紹介、導入の目的を説明をするにとどまっているという状況がある一方で、「介護現場の人が授業で説明」するなど現場との連携による先進的な取り組みがみられた。また、「副教材でLIFEをとりあげている」という動きもみられた。

#### ○教育にLIFEを活用する効果

教育にLIFEを活用する効果は、ヒアリング対象校から、多くの前向きな意見があげられた。まずは、アセスメントへの寄与、評価への寄与がある。標準や明確化という言葉に表れているように、見える化された共通の視点を有することがアセスメントや評価に寄与するのではないかという期待となっている。さらには教育全体への効果として、「LIFEが現場と教育の共通ツール」になり、介護現場との連携を進めるなどにも言及する意見が出されている。

#### ○LIFEを教育に活用するにあたっての課題

LIFEを教育に活用するにあたっての課題については、「LIFEによるデータの蓄積と介護過程教育内容の整理」や「数字では表せない内容との精査」(QOLやご利用者の意向等)など、LIFEの特徴を生かしつつ、それを既存の介護過程教育にどう生かしていくのかという整理が不十分で

あること、さらには将来的に介護福祉士が「リーダーとしてLIFEを使いこなす教育」が課題としてあげられた。

その前提として、そもそも教員がLIFEに触れたことがない、十分に理解できていないという指摘、LIFEは介護現場に広がっていないのではないか、実習担当者が理解できていないのではといった介護現場との連携の課題、介護過程教育に生かせるLIFE事例確保へのハードル、LIFEに関連する教材開発も課題としてみえてきた。さらに、現場でLIFEのフィードバックが広がった際には、フィードバックを具体的にどのように介護過程教育にコミットさせていくかという点も今後の課題としてあげられていた。

### 3. 関係者による意見交換

当初は各種調査から、介護過程授業におけるLIFE活用事例の収集を予定していたが、想定以上に教育現場にLIFEが浸透しておらず、授業事例の収集には至らなかった。

そこで、LIFEに対する理解が深い教員が集まり、アンケート調査やヒアリング調査では把握が難しかった具体的なLIFE活用の視点等を明らかにするため、未来志向的、探索的に意見交換を行う機会を設けた。

#### (1) 日 時

・令和6年3月1日（金）18:00～20:00 Zoomによる実施

#### (2) 参加者

井川淳史氏	聖隷クリストファー大学 社会福祉学部 准教授
井口健一郎氏	社会福祉法人小田原福祉会 理事 特別養護老人ホーム潤生園 施設長
真田龍一氏	全国福祉高等学校長会 事務局長
品川智則氏	東京YMCA門学校 介護福祉科専任教員
鈴木俊文氏	静岡県立大学 短期大学部 社会福祉学部 教授
武田卓也氏	大阪人間科学大学 人間科学部 教授（司会）
金山峰之氏	オブザーバー

#### (3) 主な内容

- ・介護過程教育に関する課題の共有
- ・各養成校における教育の現状
- ・介護過程教育にLIFEをどう生かしていけるか
- ・介護過程の目標と評価について
- ・教育におけるLIFE活用の可能性

### 4. 報告書の作成

アンケート調査、ヒアリング調査、関係者による意見交換の結果を踏まえ、①教育現場における介護過程と介護過程教育の現状と課題、取り組みについて、②介護過程教育におけるLIFEの活用効果について、③介護過程教育におけるLIFEの活用に関する課題、④本調査研究の本調査研究の評価と今後の課題について、まとめと考察を行った。

## 5. 検討委員会の設置

以下の学識経験者、職能団体、事業者団体からの推薦者で構成される検討委員会を設置し、調査に関する方法及び内容の検討・精査・修正等に関する助言、調査結果を踏まえた今後の提言について検討を行った。なお、調査実施及び調査結果の分析については、金山峰之氏（ケアソーシャルワーク研究所）に協力をいただいた。

検討委員会開催は全てリモート実施とした。

### ①検討委員会委員（50音順）

役職	所属等	氏名（敬称略）
委員	社会福祉法人小田原福祉会 理事 特別養護老人ホーム潤生園 施設長	井口健一郎
委員	山梨県立大学 人間福祉学部 准教授	伊藤 健次
委員	公益社団法人日本介護福祉士会 副会長 社会福祉法人不動園天ヶ瀬苑デイサービスセンター 施設長	柏本 英子
委員	全国福祉高等学校長会 事務局長	真田 龍一
委員	東京YMCA医療福祉専門学校 介護福祉科 専任教員	品川 智則
委員	日本福祉大学 健康科学部 教授	武田 啓子
委員長	大阪人間科学大学 人間科学部 教授	武田 卓也
委員	十文字学園女子大学 人間生活学部 准教授	二瓶さやか
委員	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 理事 聖隷クリストファー大学 社会福祉学部 教授	野田由佳里

### ②オブザーバー

所属等	氏名（敬称略）
厚生労働省 社会・援護局 福祉基盤課 福祉人材確保対策室 介護福祉専門官	鈴木真智子
厚生労働省 社会・援護局 福祉基盤課 福祉人材確保対策室 介護人材定着促進専門官	藤野 裕子

## 6. 外部委託等について

本調査研究では、外部への委託は行わず、検討委員会委員と事務局が協働して各種調査の実施、結果の考察、報告書作成を行った。

調査研究の過程

経過	内容
第1回検討委員会 Zoom 令和5年8月28日（月）16:00～	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 挨拶</li> <li>2. 委員紹介</li> <li>3. 協議事項               <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 令和5年度社会福祉推進事業                   <ul style="list-style-type: none"> <li>・調査研究事業概要について</li> <li>・スケジュールについて</li> </ul> </li> <li>(2) アンケート調査について</li> <li>(3) その他</li> </ol> </li> </ol>
アンケート調査の実施 令和5年10月18日～11月15日  10月30日、11月7日	<p>郵送配布 紙面・ウェブフォーム・エクセルによる回答</p> <p>礼状兼督促のはがきを2回送付</p> <p>※当初は1回送付を予定していたが、回収率が伸びなかったため、計画を変更し2回送付した</p>
第2回検討委員会 Zoom 令和5年11月28日（火）16:00～	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. アンケート調査結果のその時点でのご報告</li> <li>2. ヒアリング等候補先の検討と決定</li> <li>3. ヒアリングガイド案検討</li> <li>4. 座談会企画案検討</li> <li>5. その他（今後のスケジュール等）</li> </ol>
ヒアリング調査の実施1（対面） 令和5年12月5日（火）14:00～	日本福祉大学
ヒアリング調査の実施2（対面） 令和6年1月12日（金）13:00～	和歌山YMCA国際福祉専門学校
ヒアリング調査の実施3（対面） 令和6年1月15日（月）13:00～	淑徳大学短期大学部
ヒアリング調査の実施4（対面） 令和6年1月16日（火）8:50～	埼玉県立誠和福祉高等学校
ヒアリング調査の実施5（対面） 令和6年1月17日（水）14:45～	大阪人間科学大学
第3回検討委員会 Zoom 令和5年1月22日（月）16:00～	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ヒアリング調査進捗報告について</li> <li>2. アンケート調査結果について</li> <li>3. 報告書構成案について</li> </ol>
ヒアリング調査の実施6 令和6年2月21日（水）13:00～	西九州大学
第4回検討委員会 Zoom 令和6年2月19日（月）16:00～	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ヒアリング調査結果の検討</li> <li>2. 座談会について</li> <li>3. その他</li> </ol>

経過	内容
関係者による意見交換 Zoom 令和6年3月1日（金） 18:00～	L I F Eの視点・要素を活用した介護過程教育への期待～根拠に基づく介護実践につながる介護過程教育を推進するために～
第5回検討委員会 Zoom 令和6年3月12日（火） 16:00～	1. 報告書（案）について 2. その他

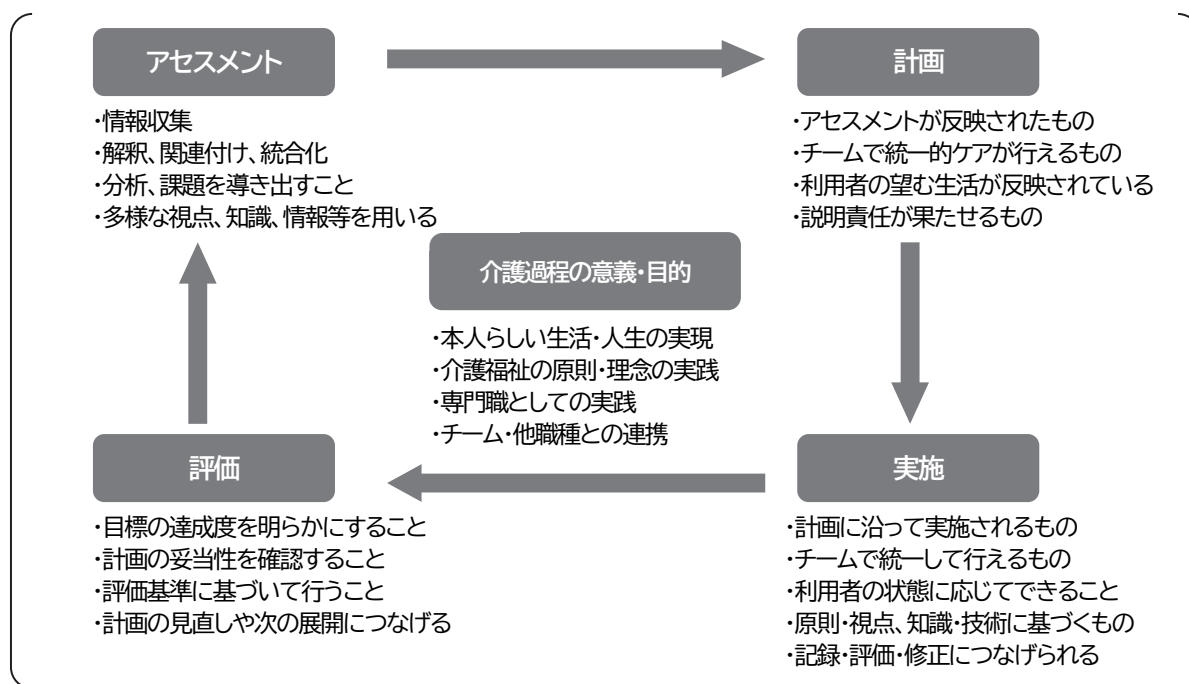
## 事業結果

### 1 教育現場における介護過程と介護過程教育の現状と課題、取り組みについて

介護過程が介護福祉士養成教育の正式なカリキュラムとして位置付けられて以降、教育現場では多様な取り組みと創意工夫を行い、学生への指導が行われてきており、LIFEという新たなシステムが介護現場に導入される以前から、根拠に基づく科学的介護実践のベースとなるのは介護過程だと位置付けられてきた。

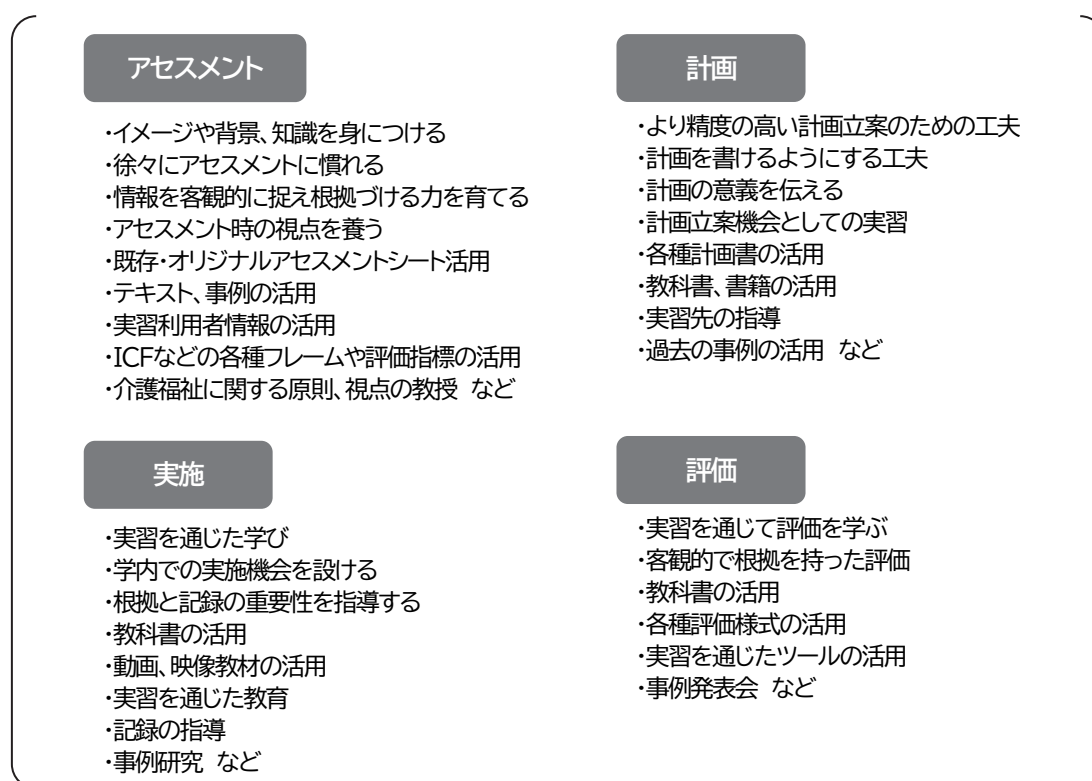
本調査研究では、介護過程は利用者が望む暮らしの実現、そして利用者が社会の一員として尊厳と自立した日常生活を享受するための手段であり実践であり、介護福祉士が専門職である所以の一つとして教育現場では受け止められていることがみえてきた。

まず、介護過程とは何か、また介護過程を構成する各プロセス段階の意義とは何かについては下図のとおり、概ね共通の認識が教育現場に浸透していることが抽出された。こうした教員の共通認識は専門職養成における教育の標準化として重要な点である。





本調査研究では、介護過程を介護福祉士の重要な専門性の柱であると位置付け、他の専門職種の教員や外部講師、実習施設等と連携しながら、様々な教授の工夫や取り組みを行っている様子が伺えた。こうした取り組みの工夫や手段のまとめについては下図のとおりである。

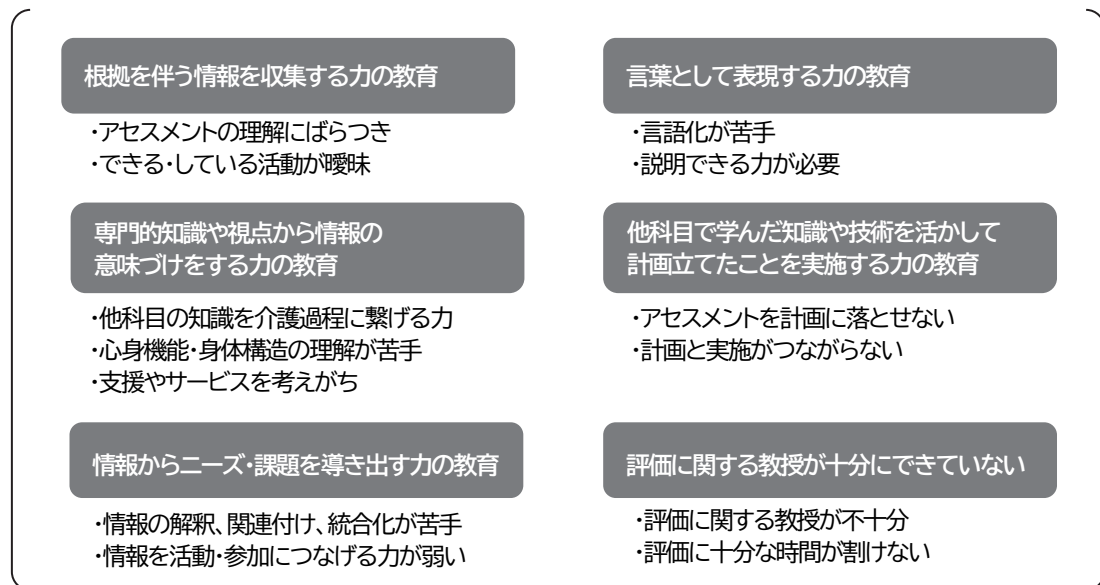


介護過程最初のステップであるアセスメントでは様々な工夫や取り組みがあげられていたこと、実習と密な連携を必要とする実施や評価での工夫など教育現場での苦心が伺えた。特にアクティブラーニングの取り組みへの工夫は調査の各所にみられた。また、ICTを活用して、これまでの手書きから、パソコンやタブレットなどを使いながらより良い学びの環境を整えて、習熟効果や指導時間の確保に努める取り組みも伺えた。これらの工夫や取り組みは、現在の教育や現場実践の実態に則したものであり、学生の介護過程に関する学びの環境をより良いものに行っていると考えられる。

一方、こうした工夫や取り組みの背景には、より質の高い教育実践を目指すということに加えて、以下のような課題への対応という面もあると考えられる。

次の図は本調査研究全体から見てきた、介護過程教育における課題をまとめたものである。課題に通底していることは、習熟ペースや多様な背景を持つ学生に対して、教員や学校側がより一層の環境整備や創意工夫が求められているという課題である。介護過程という介護福祉士の専門性の根幹を成すものの習得には、他科目や実習など養成カリキュラムの知識技術、倫理や学びを導入し、かつ継続的な反復トレーニングが求められる。

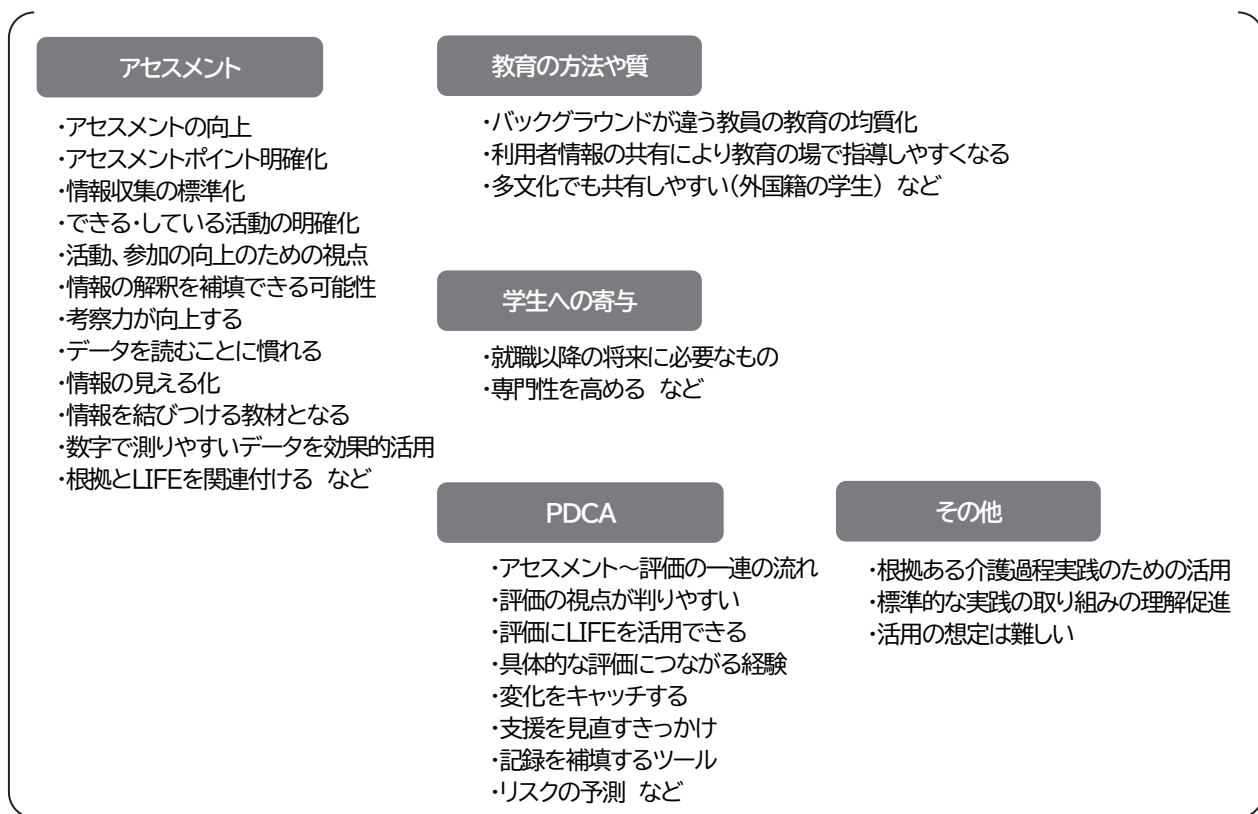
根拠に基づく介護実践を推進していく上でも、こうした課題やそれに対する各養成校の取り組みや成功例が広がり、共有されることが望まれる。



## 2 介護過程教育におけるLIFEの活用効果について

ここまで、介護福祉士養成校における介護過程教育における取り組み・工夫と課題について見てきた。ここからは、根拠に基づく介護実践を促進する上で、介護過程教育にLIFEを活用することの効果や想定される価値、活用にあたっての課題について整理を行う。

次の図は本調査研究で得られた介護過程教育にLIFEを活用する効果をまとめたものである。これらからは先にあげられていた、介護過程教育や養成校の内在的な課題に向き合う上で一定の効果が期待されることが見えてくる。



## ■アセスメント

介護過程教育の課題として最も多かったアセスメントに対して、LIFEの活用は多くの期待が寄せられていた。

ヒアリング調査においてLIFEについて尋ねると、情報収集対象である各評価項目や指標を真っ先に想起する教員が多かった。LIFEの各評価項目や指標は学生が利用者の情報収集を行う際の収集ポイントになったり、情報の精度を向上させることに寄与することが期待されていた。また、こうしたある程度定量化される情報が増えることは、その後続く解釈・関連付け、統合化に進む上で取り組みやすくする効果があるとする声が多かった。

これまで定性的な情報に偏ってしまいがちであったり、ICFのフレームに収めるまではできても、それらの情報を結びつけることが苦手だった学生も、見える化された具体的な視点で情報を評価できるようになり、根拠に基づく介護に一步近づける可能性が見出された。

一方で、利用者情報を数値化することやADLなど他職種の視点に偏重することへの危惧についても意見があった。介護福祉士の専門性は利用者のQOLやその人の望む暮らしに寄与するものであり、こうした専門性や独自性が失われるという懸念である。しかし、利用者のQOL向上のために、定量的に得られる情報を適切に介護福祉士の専門性に引き寄せて活用していくべきであるとする意見もあり、教育現場におけるLIFEへの期待と懸念、教育での実際的な活用のあり方については今後も議論していく必要がある。

ヒアリング調査や授業視察では、学生の声として、LIFEの項目や評価基準がもたらす価値は半ばゲーム感覚のように情報を組み合わせていくフレームワークの要素があるようで、アセスメントという難しいステップを楽しいものに変化させているという話もあった。定性的な情報以外の情報を効果的に活用し、学生の苦手意識を解消するという意味でもLIFEの活用は意義があるといえる。

## ■PDCA

介護過程ではアセスメント、計画、実施、評価という一連のPDCAサイクルが展開されることが求められ、これらの一貫性は重要である。調査の中では「せっかくアセスメントで導き出したことが計画に落とし込めない」「計画立案した介護実践ではなく、自分がその時できることを場当たりに実施してしまう」「評価基準が曖昧なため、計画と実施・評価がつなげられない」といった課題の声があった。こうしたPDCAサイクルの一貫性を担保する上で、LIFEの活用は一定の効果をもたらす可能性があると考えられる。

LIFE関連の評価項目や評価基準が、ある程度定量的で客観的指標として用いられていることから、アセスメント段階で得た情報が、計画段階での評価基準として位置付けられたり、その後の実施での観察・情報収集ポイントとして認識され、評価段階でその項目がどのように変化、推移したかを客観的に評価することができるというものである。

また客観的な評価が可能であるため、他の学生や実習先の職員や指導者、巡回指導にあたる教員とも、共通言語として利用者情報を共有することができるという点も利点として認識されていた。

そして、学生にとっては「なんとなく利用者さんが喜んでくれた」「笑顔になった」という評価から、「このくらい改善した」と明確に自身の関わりが利用者に効果をもたらしたという実感、成功体験につながり、介護福祉のやりがいや達成感につながるという可能性もあげられていた。

このように、LIFEの評価項目のように一定の客観性を有する情報を用いることは、これまでの介護過程教育における課題を解消する可能性があると考えられる。

## ■教育の方法や質

ヒアリング調査から、教育現場の教員は、LIFEは科学的に信頼された評価指標に基づく客観的情報が活用されているものという認識がなされていた。そして、客観的情報が活用されているために、介護実践の標準化が一定程度進むというイメージにつながっていると考えられる。標準化は、学生に一定の模範的実践、標準的な実践とは何かを伝えるきっかけになると期待される。介護福祉士が専門職である以上、一定の標準的な実践が求められる。こうした背景がLIFEへの期待

となっていると考えられる。

介護実践の標準化がもたらされることは、つまりバックグラウンドの異なる教員の教育の均等化にもつながり、根拠ある介護過程実践の理解を促進することでもある。

また、標準化された介護実践や、客観的な情報は留学生など外国籍の学生にも理解しやすいものとなり、昨今の養成校が対峙しているいくつかの教育課題に効果をもたらすものだといえるだろう。

#### ■学生への寄与

LIFEは今後現場に浸透していくものであり、また、社会はデータを用いた科学的根拠に基づく介護実践を求めてきている。このような認識も教員の中にあり、LIFEの活用がもたらす効果を学生の就職や将来に見出す意見も一定数みられた。

「現場で使われるものならば使いこなせなくてはいけない」「知っていれば就職で有利になる」といった声から、現場に必要なものは学んでおくべきという思いが伺える。また、様々なデータを活用して、介護過程を展開すること自体は学生の専門職としての力量を高めていく上で重要であり、今後はそれが当たり前になっていくという認識もみられた。現場で取り入れられるものは学生のうちから触れさせたいという思いが、教育現場にあることがわかった。

#### ■その他

LIFEを活用した教育を受けた人材が現場に入っていくことはすなわち現場実践への寄与、利用者の生活の質の向上につながるという考えがみられた。また、共通言語がもたらすものは多職種連携や介護職チームの充実だけでなく、現場と養成校のつながりを強める効果も期待されるという意見があげられていた。

一方、LIFE活用の効果について調査したものの、アンケート、ヒアリングともに「わからない」「想定できない」という声は少なからずあり、LIFEの理解、浸透が活用の大きな課題であることも見えてきた。

本調査研究からは、介護過程教育におけるLIFEの活用について様々な効果があることが明らかになった。これらの結果は、令和4年度社会福祉推進事業「科学的介護情報システム（LIFE）を活用した介護過程実践に関する調査研究事業」で得られた介護現場におけるLIFEを導入・運用したことによる介護過程への効果と重なるものも多々みられる。介護現場においても養成校においても、介護過程にLIFEを活用することに共通する効果が見出されたという点は大きな成果である。

### 3 介護過程教育におけるLIFEの活用に関する課題

LIFEの活用は、現在の介護過程教育や養成校に内在するいくつかの課題に対して一定の効果をもたらすと期待されていることがわかった。しかし、LIFEの教育現場での活用については課題も多く認識されており、これらの課題に教員がどのように向き合っていくかはさらなる検討が必要である。本調査研究で得られた介護過程教育におけるLIFEの活用に関する課題については、次の図のとおりである。

アンケート結果から、養成校の教員はLIFEについて「あまり知らなかった」「知らなかった」の合計が全体で58.7%であり、「説明できる程度」理解している割合は6.6%にとどまっていた。介護現場でもようやく導入の途についたLIFEは、教育においては浸透していないことが明らかになった。これは本調査研究で得られた重要な知見である。

また、本調査研究から見えてきたのは、単に教員がLIFEをよく知らないというだけではなく、LIFEに対する懸念など、一面的な情報によって抱いてしまう印象の影響も少なくないことである。その印象とは、利用者进行评估尺度などの客観的数値で測ることで、これまで介護福祉士が大切にしてきた個別性やその人らしさといった部分が埋没してしまうことへの懸念だと考えられる。

### 授業展開の課題

- ・LIFEの理解が必要
- ・既存カリキュラムと調整しながらの導入検討
- ・時間数が限られている
- ・理解を深める事例や教材が必要
- ・学びの環境整備の課題
- ・学生の習熟ペースに応じた環境整備
- ・LIFEに限らない情報も活用すること
- ・個人情報の取り扱い など

### 学生の状況による課題

- ・習熟ペースの差への配慮
- ・多様な背景を持つ学生への配慮(留学生など)
- ・根拠ある介護過程実践に必要な基本的力
- ・利用者の思いなどを把握する力
- ・習得に要する時間的課題
- ・学生の考える力が育たない危険
- ・学びの環境における課題
- ・習得促進のための教材
- ・個人情報の扱い など

### 教員側の課題

- ・LIFEに関する知識・理解不足
- ・LIFEの実用が未経験であること
- ・LIFEを知る機会や時間がない
- ・導入現場を理解する必要
- ・教員間での連携、共通理解
- ・LIFEを活用した教材づくり
- ・知識、教授方法の確立 など

### その他の課題

- ・LIFEが広く認知され浸透すること
- ・介護福祉士の業務とLIFEとのかかわり
- ・養成校に内在する様々な課題
- ・実習先との連携 など

LIFE自体がまだ現場に浸透していない、システム自体が発展途上であるという認識が教員にある上に、教育のカリキュラムなどに盛り込まれるなどの外的動機が無い中で、主体的にLIFEの情報を集め、現行教育の中に活用していこうという積極的な対応までには至っていない。このため、LIFEに関する基本的理解が十分でないことに加え、LIFEが利用者や介護福祉士が大切にしていることを置き去りにしてしまうものであるという懸念を抱く状況にあることが伺える。このような状況においては、建設的に教育へ活用を想定することは困難だったと考えられる。

しかし、前述のようにLIFEに対する多方面の期待もある。したがって、今時点では、根拠に基づく介護過程実践を促進するために、介護過程教育においてLIFEをどのように活用していくかを教員や介護現場などの様々な立場の意見をもとに検討・議論していくことが重要である。教授方法の確立や教材の開発はもちろん、LIFEを活用するならば、教育現場でもLIFEを見ることができ、触ることができる仕組みをつくる必要もあるだろう。また、フィードバックの活用などを教育に取り入れていく上では、個人情報などへの留意も必要となる。

これまでの調査研究において、介護過程の各プロセス、チームケア実践、多職種連携などにおいてLIFEの活用効果が確認されていることはすでに述べたとおりであるが、これは「介護福祉士養成課程における習得度評価基準の策定等に関する調査研究事業報告書」(平成30年度 生活困窮者就労準備支援事業等補助金社会福祉推進事業)の中で述べられている介護福祉士養成課程における習得度評価基準としてのコアコンピテンシーに通じるものでもあるといえる。今後は、本来的に介護福祉教育に求められる方向性に対して、LIFEをいかに取り入れていくかについて、教員の懸念を払拭しながら、未来志向で考え、議論していくことが必要といえるだろう。

## 4 本調査研究の評価と今後の課題

アンケート調査は介護福祉士養成校のうち「4年制大学」「短期大学」「専門学校」「福祉系高等学校」の4種別に実施したが、回答率がそれぞれ8.3%、6.6%、36.4%、48.8%と福祉系高等学校が最も多く、短大、大学の回収率が相対的に低くなった。回答の傾向に一定の偏りが生じたこと

や養成校種別ごとの傾向を把握するということはできなかった。

また、先述したように教員のLIFEに対する理解が十分に浸透していない中にあることは、本事業の探索的調査としての位置付けにも限界があった。しかしながら、今後LIFEの成熟、介護現場への浸透と共に、教育にLIFEをどのように取り入れていくのか検討を深める必要がある。そして本調査研究で得られたLIFE活用への期待と効果が、根拠ある介護過程実践を促進する一助になることが考えられる。

最後の課題として、本調査研究で得られた教育現場における介護過程への認識については分析していく中で「一定の共通理解」に収斂されていることがわかった。しかし、その認識について個々の回答を紐解くと、実に多様な言葉・解釈で表現されていた。介護福祉士養成校における介護過程教育の発展に向け、言葉の統一などさらに精査をすることが、根拠に基づく介護過程実践の促進を考えていく上で重要である。

事業実施機関
--------

株式会社コモン計画研究所

〒166-0015 東京都杉並区成田東5-35-15 THE PLAZA-F2階

TEL : 03-3220-5415